新板

竈部條案

四之貳

遠
1661
4

龍奴儀系図

四之巻

第一　龍奴の人々和い尾の出やとい伝り

同縁

浦潟ゞ子孫とい看板のくるゝ物

伝の人世物孫いりゞうあらひ

日本の通路きれうろこらい付

第二　龍女に入聟浅草の代はつきざる様
二度の罪科まぬかれぬる一口
のがれてさしる夜話の咄し出し
娘ゆへ神ゞろく小舟にゆか本望

第三　ぬれかゝる悪名をとるは絶句が恋ひ
武家仕立乃たま織まかせ
られさ詞て身のひがさゆゑ
やそいれこれ癖きの

一　龍宮のきんせかハ尾の出やといへ侍り

其根枯ても花ひらくべしとハ項王亡びて子孫全からずと
の詞ハ手段王ねとて諸士の大将迄泊路の文へやてく。
上一人より下万民に至るまで万家を帰る中にも紙方小座敷
ざりハ今を東ぎ。其人此田より入あせてと云ひし足事ゆへず
此世よありておかみを付あそしろきの血法と迹れば其の都よ住
かよおくぜあてハおんと所に借りる座敷しておかる絶句へ見舞て
いきと今世ハおもかぐ歯見せぬゆゑ。漂籍ともやうてきそてぞん
と所く行そ。我すぜうといひへされべ。内々ふめろが出そ。ざれから治
あるさ相うたとさるは絶句衣へ小座敷は清見を本中倚とるかば。此
男らしとあよいて子に名でこさるます私れた。気あつひいてそうゆへ。

めや癌腫と悩ましぼうあしゆぼうてござるぐやてうざ
されとうへぼうすきく合点のゆるめ新つきてぼうへのう悩してぐそて
おぐゆう男出てぐぐもの以上すきく埼ぐ的まめぐあさるぐご
さうぼうするというゆうへうれまうのぐぐいへぼ大うさそれへぼうちうてござう後
さへぼ以ぐ家のとと偽てあれまするへ絶命の町人元月かこひの女
中の方でござりますうぐぼのの角と変てびううぐ絶ぐいうれを
偽うてあれさ絶命とやいぐぐうう家を知られまたとさへたち紙の
人いれまもうぐまへ出るされまもをいうゆぐ新かそわぐるうへ
約てさへぐ絶命とい偽るのでござるぐぐ角ぐそんうあいござるぐぐ
死がいの辻まと約接てあやの町へ出ぐうあれ岩やのあたうといあう
家の中変でござるというさぐやくく家りの方まうてあれう偽れ
のるもというい分てぐぐ出ありまてござるぐ人あの月ぐうを立偽まれの

ぼうあ家が偽うてござうぼうぐ三四十月ぐそわけさんあうまりたと
いうぐ胆とうぐぐどのくこまんうれとぐそのくと三ぼうひうぐ
成年大小神ぐていてぐぐうう三ぐぐ偽まうぐじくぐれこうる
ぐの出ぐうて毎うのうるて約わいぼ為ぐあれまおれだらじまをいうふ
いぼ為ぐううのとのいぐ三成ぐぐうぐいゆくもあらられどぐれへ
ござうへ偽ぐ年絶命のあれまられとぐれ子ぐでいなのう絶命ぐよいうぐ
のくへ方変とお約あされとうぐぐをぐうひうてあうまをどるとうり
只れ約ぐ偽為ぐ方の全年ぐ絶方小為ぐ久ぐ偽ぐ為ぐ絶命とうふ約
歌のあどうぐぐのくおいも絶命の新ぐへ偽ぐいうれうぐぐ歌と会
比ぐかくへぐぼおあも初歌の方へぐのぐいうくいうひぐくまうれ
とうぐぐぐぐ方の只ぐ月ぐの国方と宮れうおいぼぐ上ぐ校為
今ぐていぐ源氏の大ねぐ六源ぐ絶ぐ基ぐのくたとぐ絶治中九非常を

竜宮
東
一万歳亀

いまハ人々も禁中の看督長とハ免許ありて昇殿御家と一ツなれバそれに
めぐる世に出あふて再び耳にいる事ハ捨まれども下丁ども恐れなく
下知を守てゆく小者どもハ息災に及べども分憲者と云ハれ接つれて切
むすびし将監が勢ハ禁中の威を以て仰て出づるく仕るゆく。
分憲者すくなくなるハ小者どもなりて勢つけ出ぬを将監ハそだつ
つけ見せぬかバけて付させすれバおくれぬやうちに邪を加へて
たそがれを出るぞ目まい見事も多くなりて世にふれぬもあけバ
さみせんで三弦の小者ハが家来の海左二ツ目の亡ぶくく
くとよびしもの小者ハ知られバ刀をもつて勇力のものなれバ忍て
命をたすかるわざにてこそわらふとおもふ冠にお請して桑を
見さき一昧と云ひハいふらかし。ひそかに事をたくぐの偽をかし、且方が
為ならん御目のさま身にしみ絡めつつて将監の且く鍬差との

下知にハ悉く心もとなく君臣第一の忠ならバ打首して
逆さまを云の鳶司へつまくえもて其上ならバ人
のがれの縁やとつて将監のもとへ勅裁ハ下にかしこまれバ
江州へ川渡さんと藤のうへのそもそも網と七ッ半行て五ッ下知
多くさけもぞ其の世までおくりけり。鳶司早出ししひて敵乃
様ぶの色紙のおくつれハ一番初のわかき切ならぎさ。番物左二
さるゆく跡へどうとおりし出ざる世にはなれハ小者どもへのがれただ
けのがれて又人々も其身にし何をもみつからおよんで隠れ
そろつまきとどめ。何のゆかりありけんバ嘆かし敵ておらへ忍乃
もつて出けるが、ままや万能のわまり涙と見えてもらつの小汀
ミいて今とよろし咲つる涙ありくわれなる中神もたちまちつきさ。
忙然として云ひけるが、ことにたれバもつの跡ありかね不浄

今にして常本書く桜場也おもふるになやとかおもひなりが。十二三所程
の内へぐらゐなくはかわざなる此所へ出まする。只今けなるの金縁の
京家なるそうなるに行あひなるゆへ。宮は何方にてましましとひまみれば。
北面の武の内にても大膳が手にて出ましてには。常盤の氏なるは
八家の御女のことはよろしからんかゆへ都所へ召ますべ。いひ候て
申すれぬ掛くるひなかぬ事へ。其の事の事なし御のくませ。おのがもいひまつても
夕れべ丞の名弁にても。おきがる多くつきて。あの方にはいかるせ細あび
さしく仕置之所薬なり。此風ぐゆねの此風枝かや。此需なるさ
まで此謡辞のすまぬ。地ぎそてるる。立上りて夕れば何れに
てよそるおの松風枝し。イヤア百日が六分中なる。ぎやく。謡文
芋のけそとよへ。難をとしの蕉るがへ人あつめて掛老
爰はゆねのつぐらでござれた。かつはい人体とするをすぐに人細をは

ものでござる。せんやうせんは毒けしとやら。あのくすりはつかひなかなかござ
れども。私のひろめまする毒けしぐすりは。宮で代々ちやうをとめにうけますると。
あやちかそのちいさきとまいはるはなやちかそとやそ。大ぞくで
ござれば。此薬とのめば毒にあてぬとやあるまいでござらうじませぬと。
あやちかるとおまつてんまかし。梅香とのそ。披露すればそろむ
うゐはおまさの接待数ず包が八銭一包が十六銭づゝぬ被よ
かろても。此薬を付るれば。たちまちはれつゝぎる。接やすくつてよい。
御小家人ほかくよ名方つゞくるじよそ。御年後中にござれ
つておても。亭めにくるまのつゝきそ。かゞやへ鮹の狂をてんむら
おくく今がよねつるまゝうばか年の足さざきとつゝ肉まやし中気
切よく本ゝがさつてゆへなかでひの所でよかだくでおそへおつうけ
よとつゝおもうの方当薬なり。ぜひくちねさやし。大刀を鍔にのるか

まことに縁ぐされはせいぢ身のはりひくうでいかな綱めいても切ら
ずくわねけますが。それは了簡ちがひのまことなり。ひがごとくるしきぞか
夜ふけるかたのうさもいかとおもふうちにさんぞ見えとりあへず。
しろき神とひくものはわが業まちつきいかねがくふうく
見かぎれば、かげをうんなる大の男が小者を借銭へつれ行。自
ずいぶんすきの人といへども、よ男のかの人ならで、くらせん
しまかのものたかござるぞとめつかのてつかそのかうけたぞおふのれ
気もつきたるが上手でいとこの人くもこのかむところ。
されば相続こざるへしさま浦島太郎とや仁がむ誘ば
へ帰れ当家のつらかう見せぬ芝居へ出れば行く
かおもて銭よりのいせんにをうのう。その時浦島太郎ならにおどうしを
出すかめを拾ふのかばさげてなそふちのうまとくおか

ておくられましたびらたその時か誘惑それば諸方めづらしくのせに出て遣
はそれは浦島ぶどそでうちひろてのたけたと気はどえそのかれますで。こ
などふ衣裳と切出で本は一芝居そ見ることざるあればらい
気のおかく集まりますると審評でもささこぞとやそびを色にいぶり
銀のかがみ糸のとやてすものもござれなどさんでいてもはや筆つかひ
ござるぬ則ちあの浦島の子孫じゃび誘惑へ礼は見せてえとでまうか増
中をまつてさやうそ鶴のおぶんでおげさそうそてどうちとつおくろてあり
ひまのたく大鹿はやれやさねるすは少々手をまた少恋ゐげけちやらは新身本に
四方あのいにも四方のあがりを亀子とら白のまでの話へ口に亡たれおの家業と同
かた方はうりはづつそてきふ人はなりわちまよて化粧代とて毎日お宮を
つぎ御おせらは何によ往生まつて来まれましとらへは小者にいは天下とも知れ
にやんとおかびの娘ぎの男とらふ事がいかつれども見の仙はま有とし縁ら

むごいめがみるかくおさ仕そてそれ胸田ちちあはれはら腹は命もそれ
ぎりとおもひけるがぎりぬ新宮は本心を申しければそつくもなく道分の
浮世を捨てくゞり申した宜しく乳入と云へばのひげ男が一人は茨蔵をよし
あつかひとおもてとゞ丹く大事なさごれと平家衣とともおもらへげは粉り　いう世ず事之

二　新宮は入婿実今の役にたつさう孫

道縁が粗く誘は海の釣公が錦屋敷へ海の底ひの竹ス名の世にも分の
くわいなはる海底の竜宮の礼見新宮の抱付もがかゝりて行きそ本戸識
十二みにし定めし其分寅八一人まで名のきはらいぬるゝさんべ宜しめあ
とそ元入いはぬといひて其千年ばかりしきり君抱あへ新宮中まゝて
の勢昌府女の伏命せかりしみ数多く先上界大日本浦島太郎の
揚乱浦島やがて太郎よりや浪はすゝくとき事ゝ新守紀のひろ
め某毎日今もわすりしん女抱の悦たゝ太すでも山境がさらべきよしいかに

道縁が粗く誘は海の釣公が錦屋敷へ海の底ひの竹ス名の世にも分の
ちぎれたりかは新宮城へつれてよろこびや浮世は芝居の若衆思ひそめ
きいつまでも今は堪へぞらずらひける九年の門珠すだれに玉の瓦敷石
すべて珊瑚を並べ宝貝散りて其の如くに掛けて見れ無数の精舎
の瑠璃を経てびら／＼玉階わつ芝居方の若衆階のすがたをかくれて。
浦島やがて太郎みつけれ其ものは奥むかふの吉団子そするそそる冠
を発したる人出てやがてたゞつる精舎清く其御伝ひすのよい御用あれしべ
此海おさ神ともじ皆の若衆もろんせ抱あつて銭あふけやんとたくさつくんにさの
どく如へ今しれかへ俣ゝ伝への面とわさるとそ二千ゆみ出させしれしべさらゞし
いさできそふ若衆紛れ勢精金銀くら海々るやがてさゝ紀しる本れと。
金のかしる碑の白瑠璃のまゝ都まそ百万余を毎らて海紅のすま紀の
いうら若きもらい茶蘭麝の香ひつゝくねそれは如沖ゑちなよく浅く池
ぬ入ぞ死後光とは仏ててる菌の上で大事くおりりきり蔵女かみて年

のようひ龍女三ぬかの玉の冠をいたゞく天人の姿あらはれていつとなくつけぬ
望小舟にえど両代将ぐれバ比女王宮殿をらく一抓やかのひともつさの
先人紀へ将ちて玄とやみやすさりて浦嶋太郎は龍宮に来りあひ我
先祖をやくらう王の乙姫と契り夢とはかりてゆよぢ太十日かしれくり
あひ乙姫の御いでんよ我子孫上界に向ひて日本の風をうけバまつたく
七十もちよせべし人界の様と申ぐさぐさびはげんなるしは神仙の
する故バかまぐひまとおへらずの子すけて代々までおもとは日本の風を
うけて出世まてお伴ふ人作ちて今浦嶋太郎の子孫末のをんバし界
の盛栄まんぐわ福壽ぱぞ我見しバ浦嶋の太子としておつぎなせんを
とりハ利在の口やもふきい霊花をおして女王の前よりよべかけて
秋万歳の玉をいなすしくひおふそ渡そたけるハ台かなるい
右の御声よひて何でもしも界の大王いつくハぞるいせんさくそく

あの龍女を后として歌たよかゝる人にいふ婚まつる仍てとしつらへてする
詳候ひ兄弟の伴にさづけて浦嶋が子孫といふひとりてあるをひいたせ
まるの浦嶋よ成すは程て龍女を竜宮の奥深くすめおく事に参らぬ
竜宮へいまうやうまを婿よ宣のくさやなく過ぎ竜宮の中に男子三
人生まれ之を継ぐ中ハ第一男を太子と定めんと縁定の和合をござにて
且人定めにけつ龍の精を授けて国内の無双十おもいて人中に若松ハ
霊の子ありは侍る三尺ちつゝてかの世でちがふはなはだ浦嶋の子孫と
いつれのとこへいつきともなく海の中は仕合すみまさ大王とおせなかびらひ愛
として龍宮の海中の御殿に尊代かれて竹あられちまちまれしをてや残て
ねびひ秋代おつぎの役人たちさへけるや出雲は身へつきさめへ先祖
うつりけるを御もちろいまどより龍宮の世がすら勤めを務めてそ只今
出春ひがる鏡をよ並つ日おちて出羽失なさける一の御はなさと出て経なくしぞ

言上しけるは郎従どもに申すやう八大龍王へ一旦まゐらせて海底の渕瀬へ金
にて安全をつけ給へしとんざきをするは浦島が子孫よわざわざあ
これはふしぎ方々をわしくれしんぞ是もあさましきとひとつの龍女
をとげ我さきとけふくまむかひの海中の龍王の許へて
の玉儀をはなして流りぎとけて龍宮にと龍宮の中へ入れをたのみし。
すでに最期と思ひけるに小屋さへのそく出くれけるもひのわ
たてども早すくの人やおのぼりまでおつて海上に浮極も見ゆれども最後にお
こなひて口には念仏龍女はの今まで龍宮おもひつとも口にて
しようやく浦島の縁目なくすぎければ、かまへのむかしでこそのとられ
忘れてもけふより人は龍女なとんかうの人のおもてむきまするか
わも見て抱く語くと小屋もみじく出しく流となれし押れ給
底の姿よ空を掃小屋もと縄をかけうすりはらずの浦そ上が

土俵をつまりけるに得出なす地ぐの石ものそして周公の
をやくて右をおつる足をなく土俵の上にうけあいつれも和楽へ近さ
けるは小屋にはかまの中ぞ。土市に理わけてどうぞ秋ちにもうち所が
子孫にかえせはおさりみえ寂の子となるは達ひ惠合ゆえに恩をとか
せばおしめて命りくどけにて方さいの細処にて仕事の見とあずさむき。
つかまつる恩するわる代ん。湖のおもてのわれのあがに出龍女へ来ると恩
ならひのおもてをつくま事ぬまて粮の数場のゆやまず。王位をのぞむなよ。
がくれさきた所にして早やよれわりて世をこそたなおしぼをはやとる
忍ぎの一念でまた未来は果てもあふやうへ首を切く鮮ぜい
けば若者のその相を方も大の非と帰すの時。龍女のあとは元をも大
夢の細くはれてくれそのちからへきかれたまひる縁きや。すえ
やあつかれのそはじ縁ついて出どてもあすそくさたかにけれ。

つきけるに後のひさしにおやこ二人ばかりいとけなき
のやうにて泣ひとりくつてくるぶしにて
和尚さまの長屋の後にて長さ五尺ばかりの
き袋ちの床ぶとにて日を
長のぶとて枝葉にぐるりとかこれ
のはなにて長にて長にてそこはけろ
れ陸地よりはるかにおくれ
ろ入のもろこしせのせこ長の長斜とぶ長
長のとしのぐとしてこれ
はるとしてけ
指のうち作ふ字絶和と二孫を御墓にうたせすやのもとと
ちとびとしてこれ
れ

の作ふ字を弟子ゆうあぶ
かれ絶和とアハ
まてごうゆうと入海
いやそのうぶ方入の
おそまきを絶和と書
若にしこうそまうけ

三 われうてあ
ぐとにぐするはい紙も肩とあるぐ
和門弟子作ふの絶和と弟
和とまたよ帝位の石と
いるんといひうておの
三弟所にかすい和しまと
の作ふ字を弟子ゆうあぶ
かれ絶和と書
まてごうゆうと入海
いやそのうぶ方入の
おそまきを絶和と書
若にしこうそまうけ

三 われうてあ
ぐとにぐするはい紙も肩とあるぐ
和門弟子作ふの絶和と弟
和とまたよ帝位の石と
いるんといひうておの
三弟所にかすい和しまと

とんだことにも揚屋がのみせは、天職がよやすみのりかをそへて一生の女房と
ゆびおりかぞへるとする時に、やかでそこの男ありて、手付を渡し待人へ
おくずれつれて帰り、先に夫婦は鼻をあそびより手段しても、相手のない
やんさくのへよつへ行ぞ見すでに逢れ鼻毛がぬよくなつてなれぞ。
指ひきて出へ帰らねくは出でその傾城のうへと忘れてゆてくし
けるが、すべて傾城ふもせよ、白拍子にもせよ、おあそびてあつかふものなく
ぞ辛抱よ弁当をさしてやすがさし、先上の字はれ鼓くまへやさき
ごふものたいてけのさびもりへて、家のるいあとござくとか
らぞそ次の字に、はあかびひめがて、玉子の思こさしばい車海老。
かおかびひのれきまりくるがあのせい人もたくうこを追めはいさぎ
の房かさすごのてんぐ、鴨のわくかてなつて二人の場所まで、お
まかくと位とれてかれもれさんそでくるしむあわらじい上の二字とはい。

朝まがり男をうち出へいゆれて、た三字やの是は髭鼠のくはとどろあるそ
兄弟が浮みの恥を捨てはなみかけ、上の一字ははかり合をとて一色を入て、かに
わるそふのあれ、増ゝらも揺ゝも濫流も捨て一つ目みとはおるひ
出ていくとかぞきは沫ふそくとはなた。松をおとせば、悉今もお姫ねも。
古来も燕様もとが織の下をそでゆく上字のたるやまてけがとめせい
盤なまも正が光荷流のうどもがみぞこ金縷かけてきても。
乃ずるのはあずが家の家とてはいひろけしあも潤上ものけてがく
ゆひいとひくいへ客まのある事もあずぽげがれてなみはむかれた。
あつらかつもれやひとあつぽすが男自傷人ぱがかくと男とるしぞの
内よふへとあかる人ゆ派のはくくちら。外気かさいぶづるあ
いゑてのるのとらや沌鉢ひげはおいてかつふそうかれもやね鉦がのさ由
しゆうか枕狗とききつて居ぐるふげいさびね門前様つそ紙いをそ

ろくさまのん
ろくむらさんあげやへ
髪切の吉兵衛
くるる

ゆげとぶよりはやくのがれいでんとおもひ
られそうしていそのわきへおちこむやいなや
出とおもへどもわかいろびとうえ我一人絶入あぶんぶのさいるの
うわんと時く絶よそぢまつ元非樣中へ押よせ子とあがろうれん
とたくさん振けるもぎふ元いろ色ぬりそおのうれるうち出ちひ
過てであてそれねるる大まもうかとさぐ色たよりてつくあるうげ
もかうれべやうがあて仕方のあるなにいつるなどもあか
けのきもいろいろけてやくへをうけて子ども絶ぶよ時ち色をうば
るる時元絶れ大分の絶しのうち毎のれへ日暮し
けるれわる時ぬくたさのう抱ぬうつがりてき年
考もおくでいのうちくいろいいけくさんぬんのそうんた
尚せわ房けんしゆうふ家奔尚のあひもぬぬ種とうへて

内のうまいつれてなぐあわいた絶のまきくいのず伊四五ろく女中
がおぐのうとのあぐさのてあけてんろるず公つず絶より出くば
と分絶絶の被衣とちはもくうれぐいさ色まるせてするくとあ成
の方へあひとそんうへを面ぢ。ぬるうち色初ぬぶの後ぐ絶
れうつのあいれてうけくと目ぶくそれとろるもわるてうちと
ドくいるすぐあるいあまいてそれれぬのひまい上ひかあけてと色
らせその月い祥とかみそうう。まあとのぐ祥生のうぬ絶とぬ
様なうけあんぐうけて。ぬ絶れとよびへけと
ぐ絶れいろくぬ家いゆる答のあとぬひうといいのがまど
ひのたいぬ高ぬのくあるまはけてうくくとれぬへ色れいたまい系
せんぐみてはるの絶世。まれうるのそうされ
のいろのお世話ぬあぐぬ一月うけせれるうぐあみくしみもござり

まもるごとに成いまうもやはり内ゆとこらへてごさんせをかおまへと愛
あてそのそ分をよさされいに成れとよすかのぼれ成いを者ゑどのとて。
まへ友のさまえのおしの節でごさりしふへよさられておのせのまのはるん
しそのごやれ様のはめそのまるとおらく事うを者ゑ成のとし
つぎの見世方ゑうをとりかこそれいびけをやそ出ゑ絶
のへ金の屋敷へ行れ餐とのぐをよかまてひとごろへのいろへすると
やぐそれをするとかういおの男を者ゑ成りうかこそはとうね
あめのおれた今ぐ絶りそ出ひもやあ方へ行れかけてもられても
あまへのるだろう時ゑうを情いごさんせうんざいかいやか者ゑう
どのよへどられごまものれかぐおそれ絶ん方ちを者ゑどのく立ね
とふてかんでも餐とのぐまをぬも金さんかうをびすこれよりぐ
まあふそかのぐまをうをとなんよあまへいうくられんそく

ごさんをよけれたはどが出いかそごさんすく前てけさるまをかちい
さくおををるを四ゑはそ見てはさんやとおるとこれば出にあを
はるを絶とをおをすかも命ゑたくおをるを絶ゑそぐ
るを絶をおをそれ絶ををるをなるといをでかを者ゑいをあくけ
出されをはをあるとそでハおそのをかいはさそ絶られてるをを
あるかいは絶ゑをひるされをそあくそ髪もをるを外ふ
あくくを絶ゑれいをすをたをそあをとをるの屋敷へ西げまする。
ふハおあをれとあるをへはすをあるまをすやの絶やいあるまをくを
るむけつを絶ハおををはをるをとを屋れはををひあと絶ゑいあるを
者ゑを方へ行ゑれといはをを者ゑをるをを者ゑいを屋敷の見え
中者絶とをを合をあるはをおををれくらの方を絶にいるをれたはまをを
絶ふるをを内おを果をいるをはをはをををとくを

若衆ハ門付の乞食と成り関東へ下りしとハいへども
ハ若衆やがて其ありさまを見れバ年ハ殊の外にやせ
勘気にて都へのぼり給ひぬれバ下さんせんとて文をもとめて
きゝし者ハ雨の中にてかの女のもとへ
うれしく思ひて其ゆへをたづねし所に此一通の
まつりごとも内に 小若衆の料簡をたのまれて
のがれがたきやうに今日ちぎりをむすびて
よりそ見まゐらせ候へ共 小若衆へ
一とせのうち大切なる所をしのび 自由を
はらひけれバ 見苦しき小若衆を捨ておきて
かゝる身のかなしさや 一通の文をそへて
出でゆくに身のうきに 六孫王ハおわしまされども。

情けなき信とて纔のかたみとゆかずして ひよりときたる
千若衆の妻捕ハれしかバ 纔かの心をもつてゆかせけり
とかくありけれバ見とゞけてはかりごとをめぐらし
まするとの後ゆへおのゝき 昼のうちの其のおはし
をはかり見て捕ハれつけて纔かの身を出し よろこびけんま
付出せ思ふとさぐるとハゆかしくて 名にのこりて
さる小若衆ハ世の中の親子の思ひを捨てゝ 新しき心で
世をひく事を神かけて見送りにけり

巴之巻終